

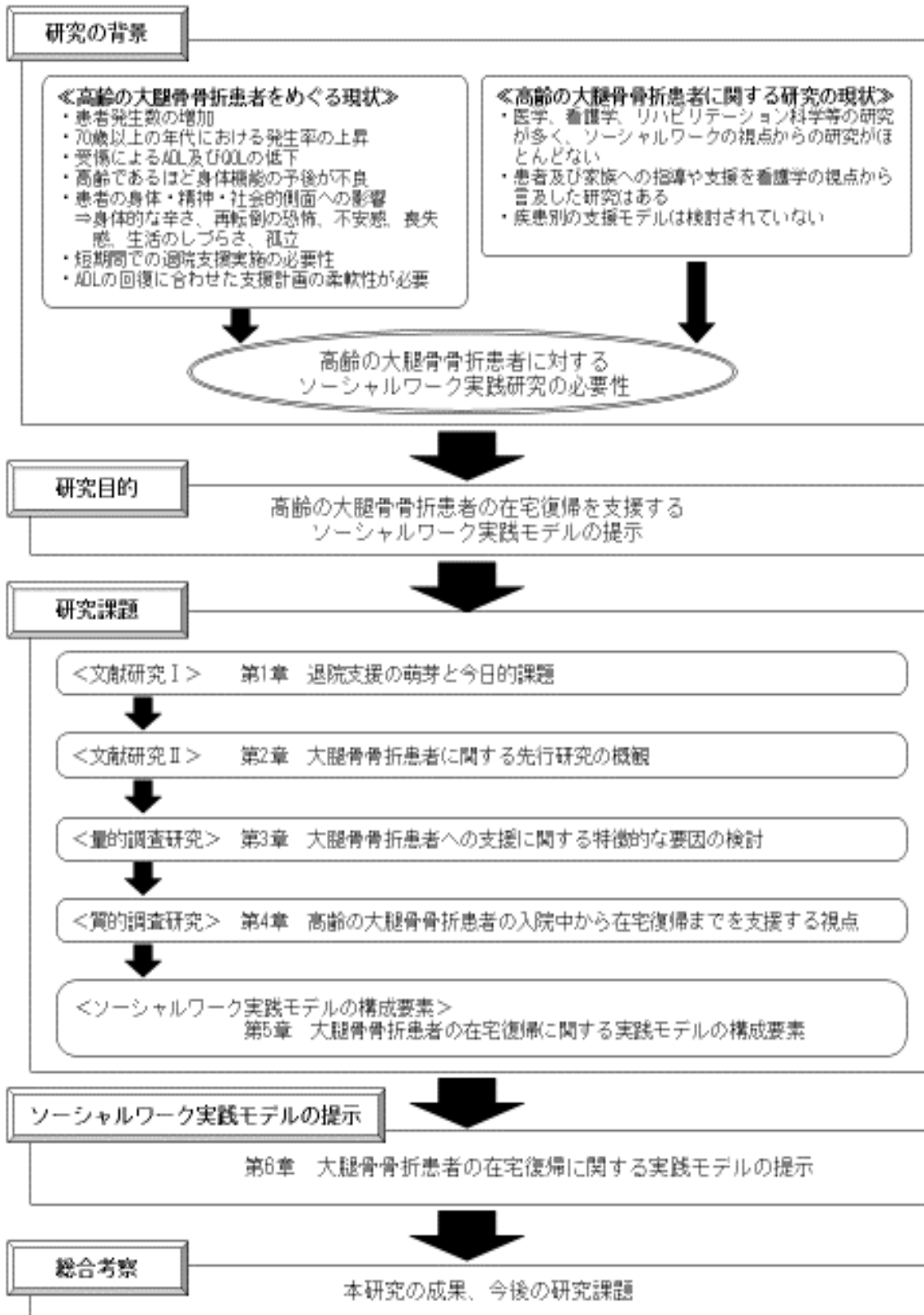
氏名（本籍）	畑 香理（福岡県）	
学位の種類	博士（保健福祉学）	
学位番号	甲第 64 号	
学位授与年月日	令和 4 年 3 月 31 日	
学位授与の要件	久留米大学大学院学則第 14 条 1 項第 2 号による	
学位論文題目	高齢の大腿骨骨折患者に対するソーシャルワーク実践モデルの研究 —在宅復帰に向けた退院支援を中心に—	
論文審査委員会	主査 久留米大学文学部教授	門田光司
	副査 久留米大学文学部教授	辻丸秀策
	副査 久留米大学大学院客員教授	鬼崎信好

論文内容の要旨

日本の高齢化率の上昇に伴い、大腿骨骨折患者も 1987 年以降増加し、今後も増加傾向が予測されている。大腿骨骨折患者の先行研究では、骨折による様々な影響が高齢者の生活の質の低下を招くことや、再骨折への不安や恐怖から外出を控えて閉じこもりになること、さらには外出や運動の不足が身体機能の低下を早めることで寝たきりになることなどの危険性の高さが指摘されている。しかし、大腿骨骨折患者の先行研究は医学、看護学、リハビリテーション科学等の視点からの研究が中心であり、ソーシャルワークの視点から高齢の大腿骨骨折患者に関わる生活課題や支援方法・効果等を取り上げた研究は見当たらない。特に、大腿骨骨折患者の退院や在宅復帰に関して、患者個人の要因から環境整備の要因にまで注目した体系的な支援方法の検討については未着手であり、患者の入院中から退院後の在宅生活までを視野に入れた一連の支援展開や内容は明らかになっていない。

以上から本研究は、高齢の大腿骨骨折患者の在宅復帰を支援するソーシャルワーク実践モデルを検討し、提示することが目的である。この研究目的を達成するために、次の 6 点について検討した。①医療ソーシャルワーカー（以下、MSW と略す。）による退院支援の枠組みと問題点を整理する。②大腿骨骨折患者への支援に関する先行研究の到達点と課題を明らかにする。③大腿骨骨折患者の支援を展開する上での特徴的な要因の検討を行う。④当事者が受傷してから在宅生活に至るまでの生活課題を明らかにする。⑤ソーシャルワーク実践モデル構築に必要な視点と要素を検討する。そして、⑥ソーシャルワーク実践モデルを提示することである。本研究の構成は図 1 に示す通りである。

第 1 章では、MSW の業務指針における「退院援助」の変遷を整理し、①MSW が行う退院支援、②高齢患者への退院支援、③退院支援における MSW と看護師の役割に焦点を当て、先行研究の検討を行った。その結果、①MSW が行う退院支援の特徴としては退院支援の一部を詳



細に研究したものが主で、ソーシャルワーク支援過程の全体像を明確にしたうえでの退院支援研究はほとんどなかった。②高齢患者への退院支援の先行研究では、高齢者に対する医療政策及び介護保険施策の影響を受けた研究が主であった。③退院支援における MSW と看護師の役割に焦点を当てた先行研究からは、退院支援において多職種連携を向上させる必要性と、経営者を含む組織全体で退院支援業務の理解を深めることが重要であることがわかった。

第 2 章では、高齢の大腿骨骨折患者に関する先行研究の分析を行った。その結果、①大腿骨骨折を経験した高齢者の ADL 及び QOL に関する先行研究では、大腿骨骨折を経験した高齢者は受傷前に比べると、著しく ADL が低下するわけではないが、高齢になるほど身体機能の予後が不良であった。また、ADL が低下することで、家族及び周囲からの助け、介護サービスの利用等によってある程度自立した生活を営んでいた。ADL の低下により受傷前の生活との違いを自覚することや人的及び物的環境が変化することなどによって、心理的側面への影響、経済的な負担等が生じることが明らかになった。また、②高齢の大腿骨骨折患者と家族の退院時から退院後の生活に関する先行研究では、看護師の視点から大腿骨骨折を経験した人の不安と活動面に関する問題や介護支援に関する問題、それに対するケアや指導等が指摘されている。そして MSW の視点からは、包括的な支援計画策定の必要性や在院日数に影響を及ぼす要因が指摘されていた。

第 3 章では、第 1 章と第 2 章の先行研究から、大腿骨骨折患者の支援を展開する上での特徴的な要因の検討を行うことを目的として、アンケート調査を実施した。調査対象は、2018 年 8 月 1 日現在で一般社団法人回復期リハビリテーション病棟協会のホームページ (<http://www.rehabili.jp/>) に公開されている全ての病院とし、調査対象者は回復期リハビリテーション病棟を担当している MSW のうち、1 施設につき 1 名とした。調査方法は、質問紙を用いた郵送調査法とし、無記名自記式調査票により実施した。アンケート調査票は当該病棟に配置されている MSW 1 名分と返信用封筒等を病院長宛 (1, 181 か所) に郵送した。調査期間は、2018 年 8 月 6 日から 2018 年 9 月 30 日で 345 名から回収し、回収率は 29.2% (345/1, 181) であった。このうち、調査上、必要な回答項目において未回答であった 6 名を除外した 339 名を分析対象とした。アンケートでは、①調査対象者の属性、②これまでに担当した大腿骨骨折患者のうち高齢入院患者 (65 歳以上) の状況、③高齢入院患者において「大腿骨骨折」「脳血管疾患」「廃用症候群」の患者それぞれに対する業務実施状況に関する項目について回答を求めた。分析には、IBM SPSS statistics ver.24 を用いて統計処理を行った。なお、本調査の実施にあたり、研究倫理委員会の審査・承認を得ており、アンケート調査票に明記した。

調査結果からは、第一に、大腿骨骨折患者と他疾患患者を比較すると退院支援について次の 3 点が明らかになった。(1) 大腿骨骨折患者は他疾患と比較しても一定程度のサービス導入を検討する必要があること、(2) 受傷による身体機能の低下は大きいものの、回復に向けた希望をもつことができること、(3) 退院後の生活を支援するには、身体機能の回復程度

に応じた生活様式や行動範囲を予測しながら検討する必要があることである。

第二に、地域活動が他の業務に比べると実施されていないことが明らかになった。特に大腿骨骨折患者においては再骨折予防に取り組んでいくことが喫緊の課題であるため、MSW が果たす地域活動の意義を再認識し、多職種との協働による地域づくりを進めていく必要性が見出された。

第三に、これまで大腿骨骨折を経験した高齢入院患者への MSW による支援では、患者の性別によって支援に違いがあることを明らかにした研究は見受けられなかった。しかし、本調査では大腿骨骨折を経験した高齢入院患者の性別によって MSW の支援に差があることを明らかとなった。

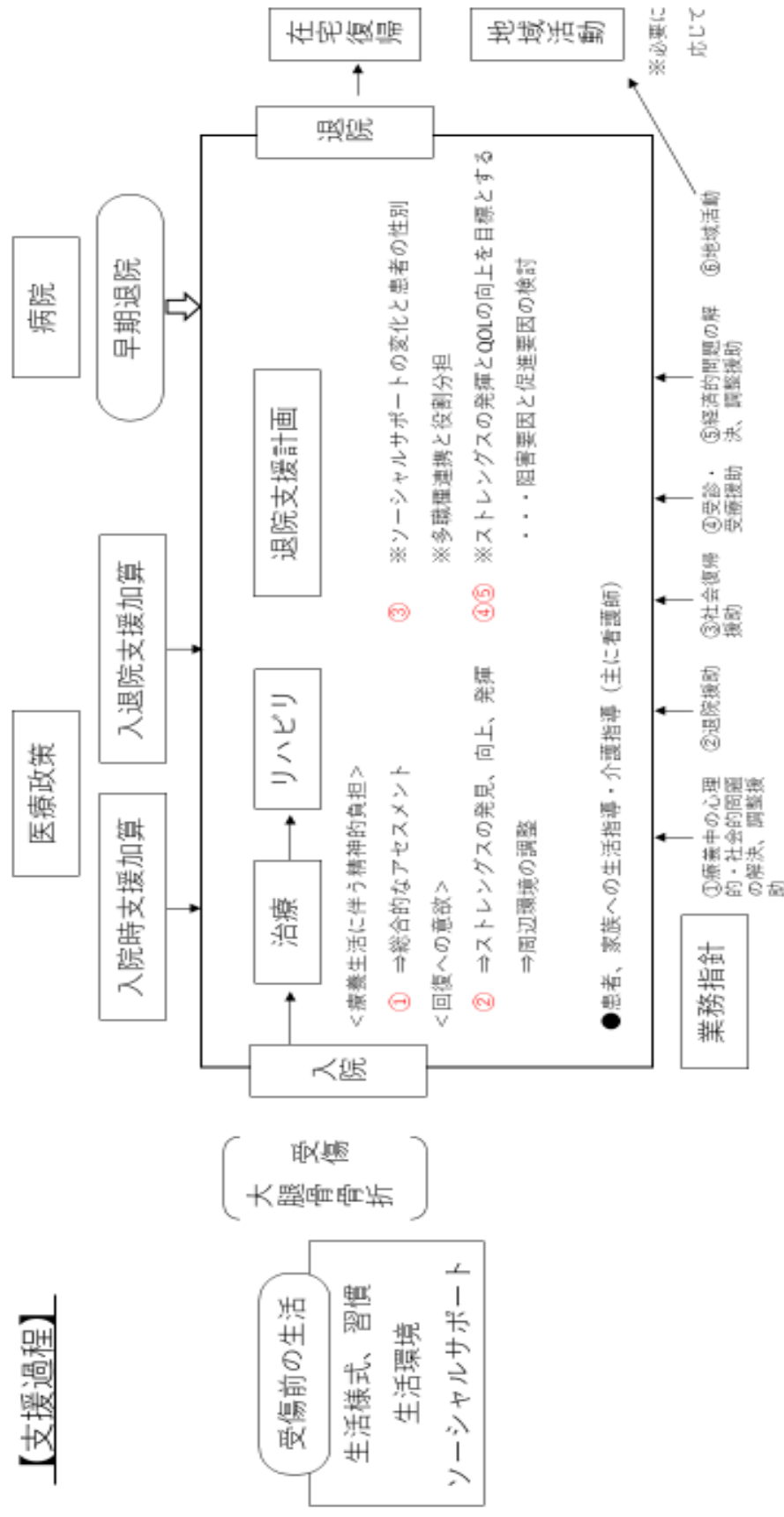
第四に、MSW の性別によって支援内容に違いがみられることが明らかになった。具体的には、男性 MSW が疾病受容という医学的側面の強い支援に積極的な一方で、女性 MSW は退院後の在宅生活で必要になる工夫や生活場所そのものといった暮らしの場面にに関する支援を得意としていた。

第五に、MSW の経験年数が多くなるほど、丁寧な関わりを通じて支援を行っていることが示された。加えて、経験年数が 10 年以上の MSW の方がそれ以下の経験年数の MSW よりも、女性高齢患者が在宅復帰後の家事役割を求められやすい傾向であることを理解できるようになると考えられた。

第 4 章では、当事者が受傷してから在宅生活に至るまでの生活課題を明らかにすることを目的として、インタビュー調査を実施した。調査対象者は、大腿骨骨折を経験した 65 歳以上の高齢者 6 名（男性 1 名、女性 5 名）である。インタビューは半構造化面接を採用し、受傷してから入院を経て在宅復帰に至るまでの間で、①入院中に感じた不安な点、②退院後の在宅生活について困難を感じる点の 2 点について自由に語ってもらった。調査期間は 2019 年 8 月から 2019 年 10 月までであり、1 人につき 60 分程度のインタビューを実施した。分析方法は、佐藤（2008）の質的データ分析法を参考にし、VERBI MAXQDA2020 を用いて分析を行った。なお、本調査の実施にあたり、研究倫理委員会による審査を受け、承認を得た。調査対象者には文書と口頭で説明し、同意を得ている。

調査の結果から、次の 6 点が明らかになった。(1) 入院中の大腿骨骨折患者の療養生活では、退院後の生活を見据えることで生起する意欲や、他者との交流が与える影響により、当事者が抱える課題の深刻度を緩和させる可能性があること、(2) 入院中の療養生活における身体・健康面での課題は、退院後の在宅生活において身体的回復や骨折に係る様々な経験を通じて、身体・健康面の意識の向上と人生観の変容へつながり得ること、(3) 退院後の在宅生活では、家族への感謝の気持ちが再認識もしくは増幅されることがあること、(4) 入院中の療養生活と退院後の在宅生活における課題は、身体・健康面では質を変えながら課題が引き継がれていること、(5) 入院生活から在宅生活へと移行することで、それまで制約のあった他者との交流が回復し入院前より強化されること、(6) 退院後の在宅生活では、大腿骨骨折を経験した高齢者が抱える課題よりもストレスが強化されれば、QOL を向上させる要

【支援過程】



【実践マニュアル】

実践マニュアル①【療養生活に伴う精神的負担の把握】

実践マニュアル②【回復への意欲に関する介入】

実践マニュアル③【ソーシャル・サポートと患者の性別への着眼点】

実践マニュアル④【在宅復帰後のストレスングスとQOLの促進要因の検討】

実践マニュアル⑤【在宅復帰後のストレスングスとQOLの阻害要因の検討】

図2 実践モデルの全体像 (筆者作成)

困になり得ることが明らかになった。

第5章では、先行研究と調査結果の考察を踏まえ、本研究が独自に提示するソーシャルワーク実践モデルの構成要素を示した。また、この支援過程では受傷から入院時、そして在宅復帰までを一連の流れとして捉えることに力点をおいて整理した。

第6章では、高齢の大腿骨骨折患者の在宅復帰に関するソーシャルワーク実践モデルの全体像(図2)を提示した。具体的には、ソーシャルワーク実践モデルの支援過程と介入手続きについて述べていった。

図2は、受傷前の患者の生活を視野に入れ、大腿骨骨折の受傷から入院、そして退院までの支援過程を左から右に時系列に示している。また、退院後の在宅生活への復帰をゴールとし、在宅生活でのQOLを高める点にも着目して構成した。支援過程の上には社会的背景として医療政策の影響と病院からの役割期待を示し、矢印でその関係を示した。支援過程の下には専門職としてのMSWの実践範囲を規定した業務指針を記載し、医療ソーシャルワークの枠組みを基盤としていることを表した。さらに、支援過程を展開する上で重要となる具体的な介入の視点や手続き、留意点等を提示する実践マニュアルが伴うことも表している。

本研究で提示した高齢の大腿骨骨折患者の在宅復帰に関するソーシャルワーク実践モデルの効果としては、①入院から退院まで切れ目のない支援を提供することができること、②患者中心の質の高い支援を迅速に提供することができること、③看護師との役割分担の円滑化とMSWの病院内での位置付けの明確化の一助になることを挙げた。

終章では、本研究の成果と限界、そして今後の研究課題を示した。本研究は、高齢の大腿骨骨折患者の在宅復帰を支援するソーシャルワーク実践モデルを提示することが目的であったが、先行研究の到達点を踏まえて独自のソーシャルワーク実践モデルを提示できたことは、本研究が示した新たな知見である。先行研究では、MSWによる退院支援に関して場面や技法、対象問題を焦点化した検討は見られるが、退院支援に関するソーシャルワーク支援過程の全体像と具体的な介入手続きは明らかになっていなかった。また、高齢者の退院支援についても、在宅での介護の問題や高齢患者自身の心身の不安定さ、家族との関係、経済的な問題等の支援に関する部分的な問題や事象についての検討が見られるのみであり、生活支援としてのソーシャルワークの専門性を踏まえた研究はほとんどなかった。このような研究動向から、本研究ではソーシャルワークの専門性にに基づき患者の生活の変容を広く把握しつつ、大腿骨骨折の受傷に伴う心身の状態や生活の変化への適応過程を一体的に捉えた実践モデルを検討してきた。これにより、先行研究では明らかになってこなかった患者の生活支援に関わる一連の支援過程を社会福祉学的な観点から提示することができた。

論文審査の要旨

高齢社会のわが国において、高齢の大腿骨骨折患者の増加傾向が予測されている。しかし、大腿骨骨折患者の先行研究は医学、看護学、リハビリテーション科学等の視点からの研

究が中心であり、ソーシャルワークの視点から高齢の大腿骨骨折患者に関わる生活課題や支援方法等を取り上げた研究は見当たらない。そこで、本研究の目的は、高齢の大腿骨骨折患者の在宅復帰に関するソーシャルワーク実践モデルを提示することである。

本研究を進めるにあたり、次の6点が検討された。①MSWによる退院支援の枠組みと問題点の整理、②大腿骨骨折患者への支援に関する先行研究の分析、③大腿骨骨折患者の支援を展開する上での特徴的な要因分析、④当事者が受傷してから在宅生活に至るまでの生活課題の分析、⑤ソーシャルワーク実践モデル構築に必要な視点と要素の抽出、そして⑥ソーシャルワーク実践モデルの提示である。

以上の研究目的と研究結果より、本研究の開拓的、独創的な点は次の通りである。

- ①高齢の大腿骨骨折患者に対する MSW による退院支援において、ソーシャルワーク支援過程の全体像と具体的な介入手続きに関する研究がなされてこなかったことを明らかにした。
- ②高齢の大腿骨骨折患者の退院支援においては、身体機能の回復程度に応じた生活様式や行動範囲を予測しながら支援を検討していく必要があることを明らかにした。
- ③受傷前の患者の生活を視野に入れ、大腿骨骨折の受傷から入院、そして退院までの支援過程を時系列に捉え、退院後の在宅生活への復帰をゴールとし、在宅生活での QOL を高めていくことにも着目していくことを明らかにした。
- ④これらの先行研究及び調査結果に基づき、高齢の大腿骨骨折患者の在宅復帰に関するソーシャルワーク実践モデルを提示したことである。

本論文のいくつかの章は、査読論文として掲載されている。ゆえに、本論文は課程博士論文として十分評価できるものであるといえる。

審査結果の要旨

令和4(2022)年1月26日(水)、久留米大学御井学舎253教室において午前10時30分から午前11時00分に開催された公開発表、同日午後12時00分からの口頭試問及びその後の審査委員会により、畑香理氏の論文が博士(保健福祉学)の学位に値する研究であることを審査委員会は全員一致により確認した。